
江別市 人口動態に関する分析

報 告 書

平成 29 年 6 月

江別市

* 目 次 *

1. 本市の人口動態の現況	1
1. 1 本市の人口動態	1
1. 1. 1 自然増減（出生、死亡）について.....	1
1. 1. 2 社会増減（転入、転出）について.....	2
1. 1. 3 本市の人口動態の全体傾向について.....	3
1. 1. 4 年齢構成について.....	4
1. 2 地区別の人口動態	7
1. 2. 1 江別地区.....	7
1. 2. 2 野幌地区.....	9
1. 2. 3 大麻地区.....	11
2. 人口動態に関する考察	12
2. 1 人口動態に関する考察	12
2. 1. 1 学生数の推移.....	12
2. 1. 2 就業者数の推移.....	14
2. 1. 3 高齢者数の推移.....	15
2. 2 本市の人口動態のまとめ	16
2. 2. 1 市内の大学の在籍者数の減少.....	16
2. 2. 2 市内に居住する社会人の構成の変化.....	17

1. 本市の人口動態の現況

1. 1 本市の人口動態

本市の人口動態について自然増減、社会増減など様々な側面から検討を行います。

1.1.1 自然増減（出生、死亡）について

本市における出生数、死亡数の推移を図 1.1.1 に示します。平成 12 年度までは出生数が死亡数を上回っていました。その後、平成 13 年度から 16 年度ではほぼ均衡の状態となり、それ以降は死亡数が出生数を上回る状態が続いています。平成 28 年にはこの差が 579 人にまで広がっています。

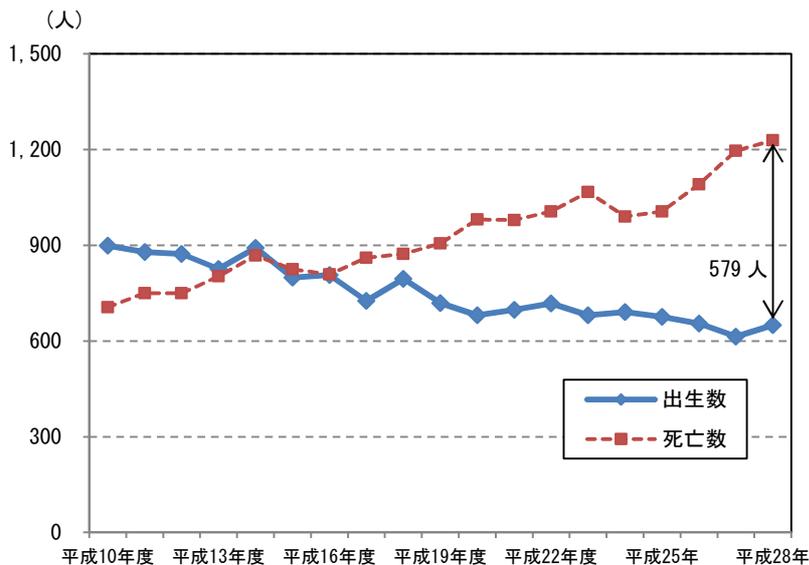


図 1.1.1 出生数、死亡数の推移

注) 総務省による調査方法の変更に伴い、平成 25 年より集計期間を変更

1.1.2 社会増減（転入、転出）について

本市における転入者数の推移を図 1.1.2 に、転出者数の推移を図 1.1.3 に示します。道内、道外からの転入者合計は、平成 10 年度から 28 年にかけて約 2,300 人減少していましたが、平成 27 年から 28 年にかけては 247 人増加しています。道外からの転入者数はほぼ横ばいで推移していることから、道内からの転入者数の推移が市内への転入者全体に与える影響が大きくなっています。

また、図 1.1.3 に転出者数の推移を示します。図から転入者数は緩やかに減少傾向にあることがわかります。転入者のような大幅な減少ではありませんが、平成 10 年度に比べて 28 年は約 1,500 人減少しています。転出者の内訳として、道内への転出者は緩やかな減少傾向にありますが、道外への転出者はほぼ横ばいで推移していることがわかります。

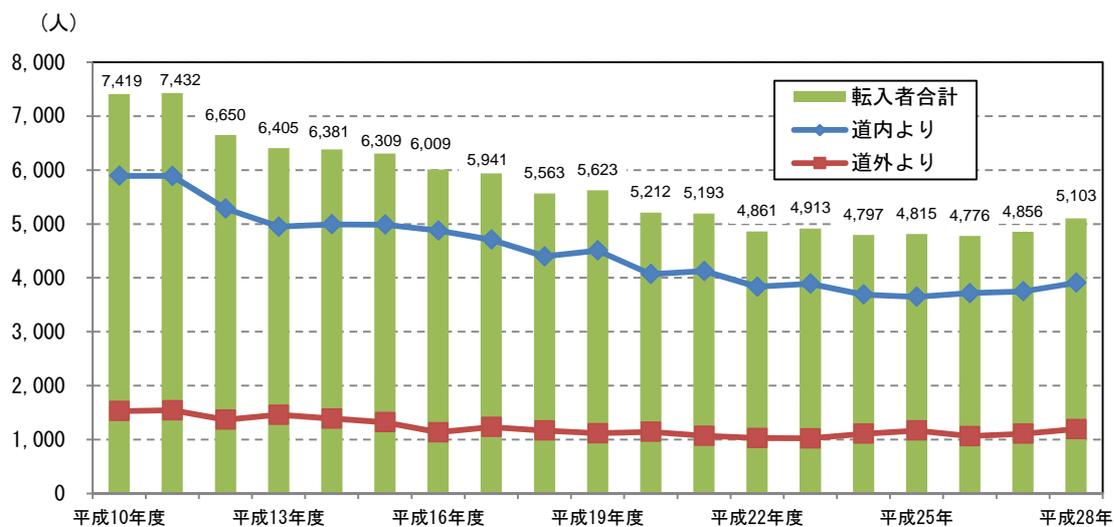


図 1.1.2 転入者数の推移 (戸籍住民課)
注) 外国人を含む

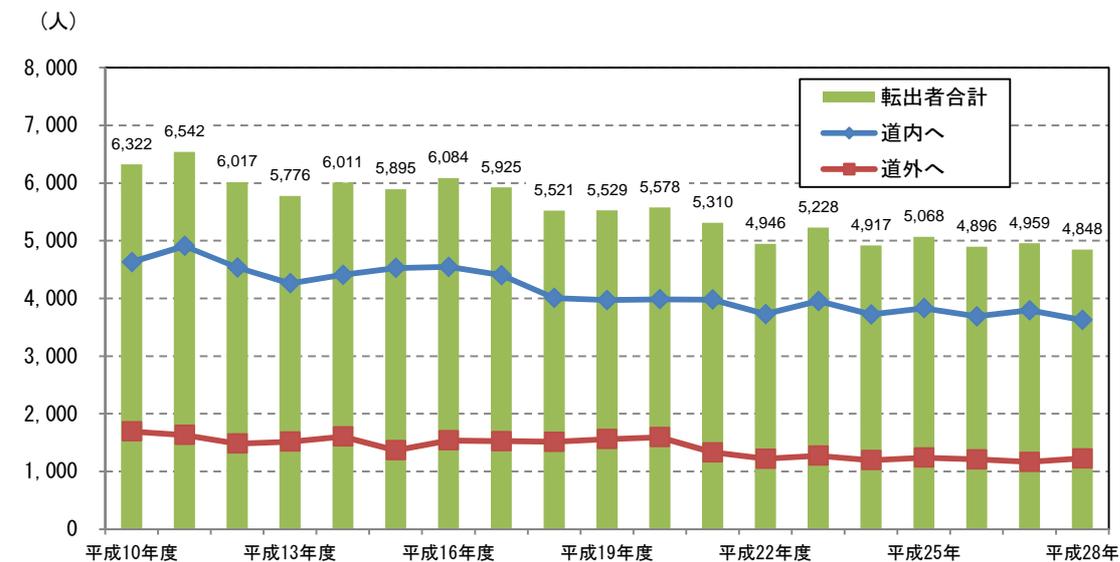


図 1.1.3 転出者数の推移 (戸籍住民課)
注) 外国人を含む

1.1.3 本市の人口動態の全体傾向について

自然増減、社会増減の推移を図 1.1.4 に示します。図より、自然増減（出生数と死亡者数の差）は、平成 10 年度から 20 年度にかけて減少しており、21 年度から 25 年はほぼ横ばい、26 年から再び減少しています。

また、社会増減（転入者数と転出者数の差）は長期的に減少傾向にありましたが、平成 28 年は 255 人（外国人含む）の「社会増」に回復しています。

人口減少の要因として、出生数、転入者数の減少が考えられますが、出生数は全国的な少子化の傾向から大きな回復は難しいと考えられます。転入者数は前出の図 1.1.2 に示すとおり、長期的な減少傾向が続いておりましたが、平成 27 年からは増加に転じています。

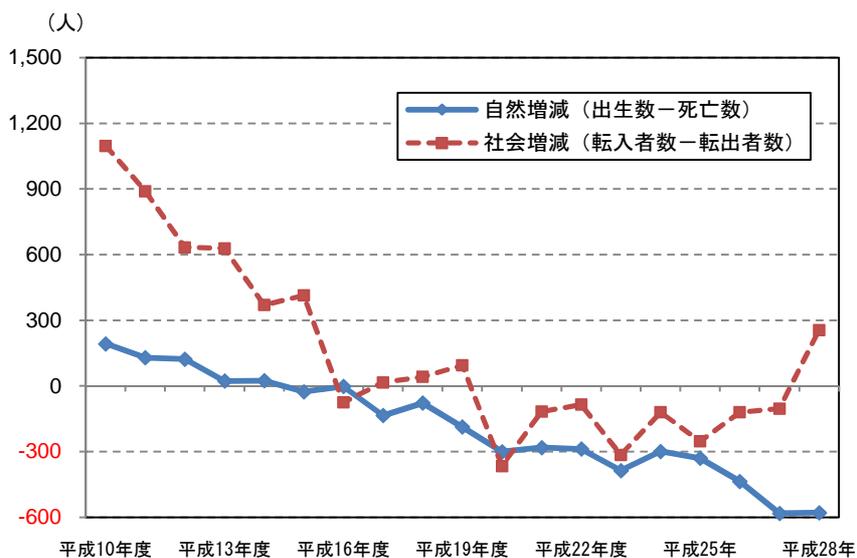


図 1.1.4 自然増減、社会増減の推移 (戸籍住民課)

1.1.4 年齢構成について

本市における年齢（年齢三分区）別の人口の推移を図 1.1.5 に、年齢別人口割合の推移を図 1.1.6 に示します。**人口は平成 25 年から 29 年にかけて約 2,000 人減少**しています。内訳として、**年少人口（0～14 歳人口）はこの間に約 800 人、生産年齢人口（15～64 歳人口）は約 5,700 人減少しているのに対し、高齢者人口（65 歳以上の人口）は約 4,500 人増加**しています。

一般に、高齢化の程度を示す分類として、高齢者人口の割合が 21%を上回ると超高齢社会とよばれます。平成 29 年の本市での高齢者人口の割合は 28.7%となっています。

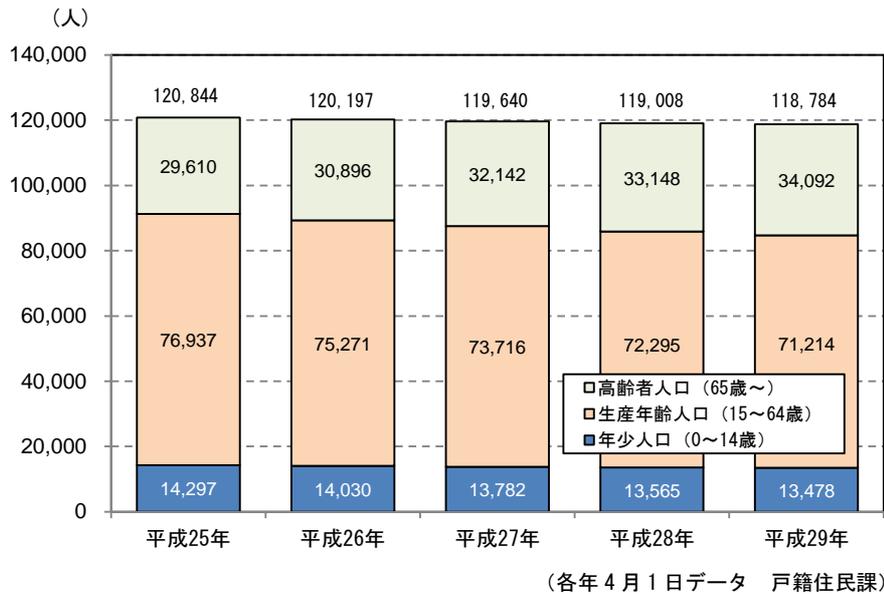


図 1.1.5 年齢別の人口の推移

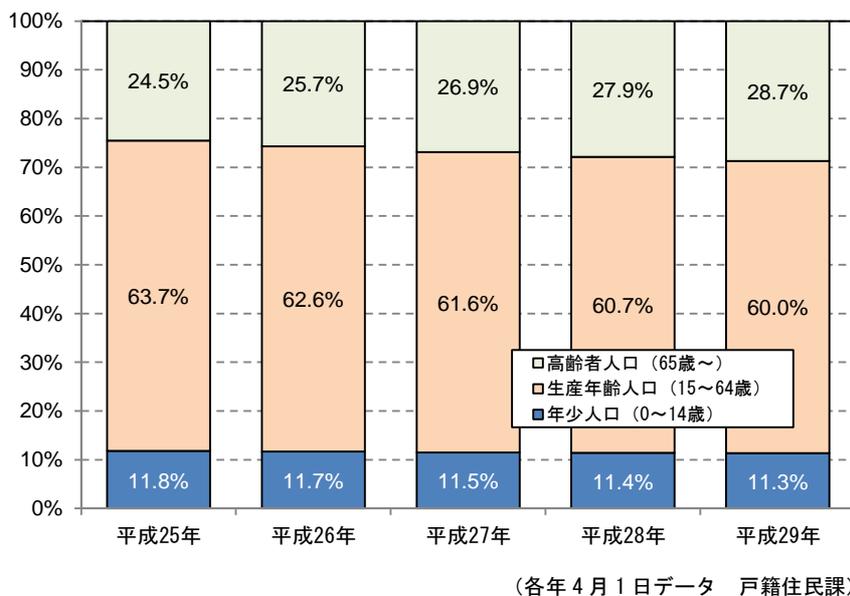


図 1.1.6 年齢別人口割合の推移

また、年齢構成の変化を把握するため、各歳別の人口構成を図 1.1.7 に示します。この図は縦軸を人口、横軸を 1 歳刻みの年齢とし、各歳別の人口構成を示したものです。平成 19 年、24 年、29 年の人口構成を図にしているため、それぞれの線形が水平方向に 5 歳ずつ離れて描かれています。ここで、図中の 20 歳前後のピークは市内の大学、短大などへの通学のために市内に居住している人口 と考えられます。また、25 歳前後の年齢層での大幅な減少は、大学等の卒業、就職等を機に市外へ転居するケースが多いため と考えられます。

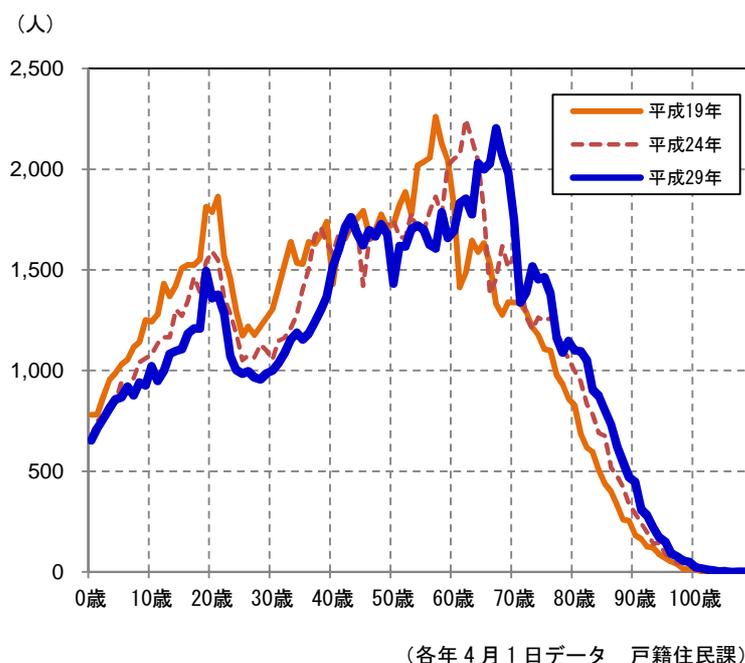


図 1.1.7 各歳別の人口構成の推移

表 1.2.2 には、各年の年齢別人口増減者数の推移（H19→H20 は平成 19 年 4 月 1 日の年齢別人口が翌年の平成 20 年 4 月 1 日までの間にどの程度増減するか）を示します。**20～24 歳、25～29 歳の人口は継続的に減少**していることがわかります。また、**30～40 歳代にかけてのいわゆる「子育て世代」の年齢層は、他の多くの年代で減少傾向を示すなかで、増加の傾向**を示していることがわかります。

表 1.2.2 各年の年齢別人口増減者数の推移 (戸籍住民課のデータをもとに作成)

	H19 → H20	H20 → H21	H21 → H22	H22 → H23	H23 → H24	H24 → H25	H25 → H26	H26 → H27	H27 → H28	H28 → H29
0～4 歳	892	801	823	814	806	856	797	836	816	846
5～9 歳	98	70	54	81	68	95	91	68	90	119
10～14 歳	61	35	39	36	22	54	16	24	25	51
15～19 歳	183	179	64	118	119	119	132	95	120	218
20～24 歳	-608	-721	-656	-550	-556	-463	-544	-567	-526	-524
25～29 歳	-224	-277	-156	-189	-240	-152	-236	-180	-190	-138
30～34 歳	99	20	79	4	33	38	53	56	38	130
35～39 歳	83	72	92	82	90	133	42	99	45	121
40～44 歳	50	-14	33	-15	-15	61	14	62	20	74
45～49 歳	11	-29	-24	-18	-40	12	-33	3	-13	-9
50～54 歳	-22	-39	-6	-9	-60	-3	-77	-29	-16	-30
55～59 歳	-27	-9	38	-3	-16	-8	-25	-12	-2	-31
60～64 歳	-6	6	28	2	-48	-5	-27	-32	3	23
65～69 歳	-62	-62	-41	-57	-45	-15	-73	-54	-56	-68
70～74 歳	-53	-79	-79	-63	-108	-63	-49	-88	-96	-85
75～79 歳	-110	-108	-139	-106	-104	-131	-124	-122	-143	-133
80～84 歳	-138	-161	-189	-152	-170	-195	-151	-208	-195	-200
85～89 歳	-136	-161	-135	-163	-179	-195	-218	-201	-238	-238
90～94 歳	-100	-101	-112	-115	-139	-140	-142	-200	-179	-217
95～99 歳	-52	-72	-58	-58	-72	-72	-74	-87	-108	-103
100～104 歳	-12	-15	-12	-16	-16	-20	-17	-18	-25	-27
105 歳～	-1	-3	0	0	0	-2	-2	-2	-2	-3
合 計	-74	-668	-357	-377	-670	-96	-647	-557	-632	-224

1. 2 地区別の人口動態

本市の江別、野幌、大麻の各地区における人口動態の傾向の検討を行います。

1.2.1 江別地区

江別地区における年齢別の人口の推移を図 1.2.1 に、年齢別人口割合の推移を図 1.2.2 に示します。平成 25 年から 29 年にかけての地区人口は緩やかな減少傾向にあります。しかし、人口の内訳をみると年少人口および、生産年齢人口の割合は減少傾向、高齢者人口の割合は増加傾向にあります。平成 29 年は平成 25 年に比べて年少人口は約 800 人の減少、生産年齢人口は約 2,700 人の減少、高齢者人口は約 1,800 人増加しています。

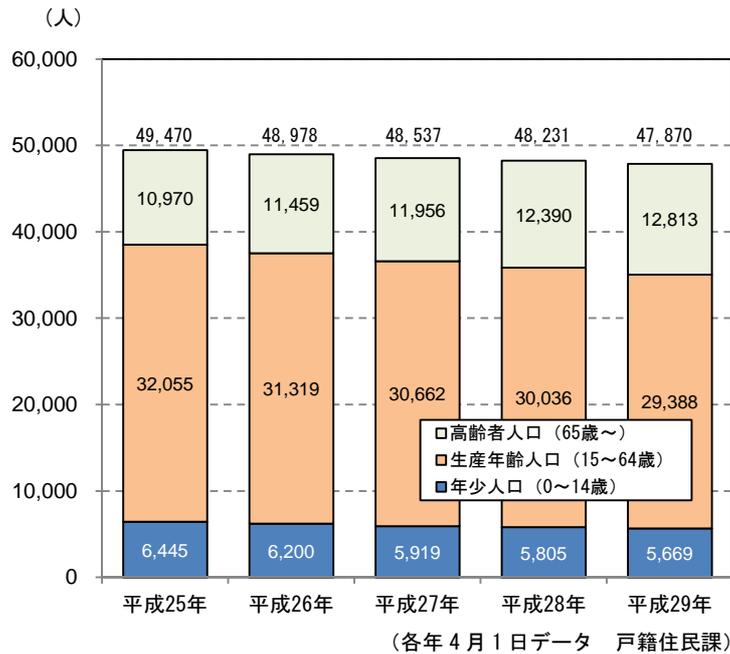


図 1.2.1 年齢別の人口の推移

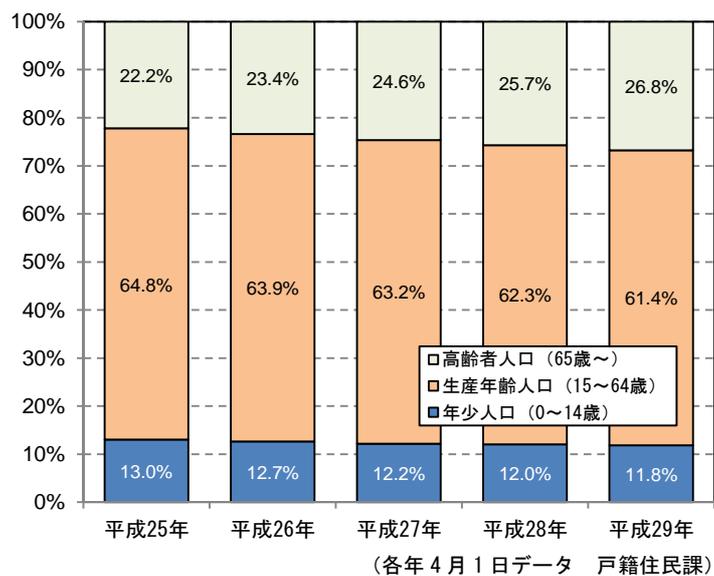


図 1.2.2 年齢別人口割合の推移

また、図 1.2.3 に前出の図 1.1.7 と同様に江別地区における各歳別の人口構成の推移を示します。平成 29 年は平成 19 年、24 年と比較して 40 歳代前半までは減少傾向にありますが、60 歳代後半からは増加傾向にあります。しかし、地区人口全体の人口構成としては前出の図 1.1.7 に示す市全体と比べて大きな違いはありません。

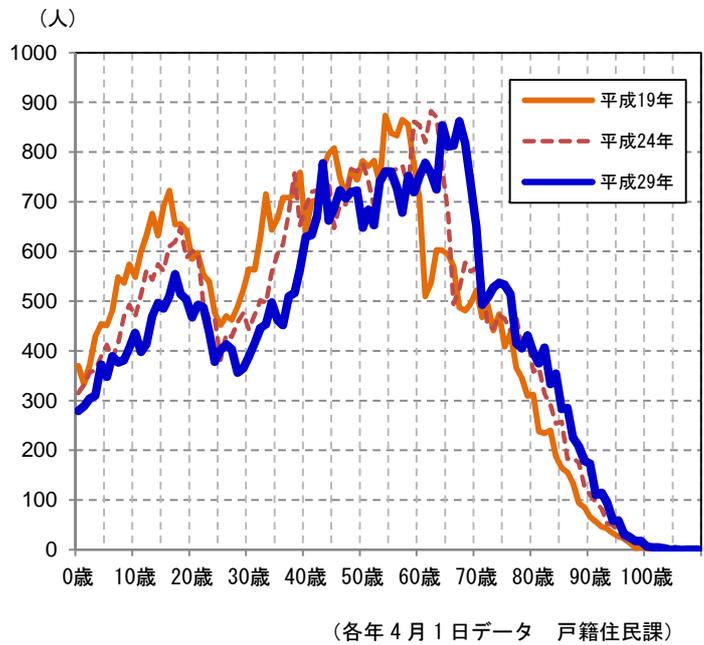


図 1.2.3 江別地区における各歳別の人口構成の推移

1.2.2 野幌地区

野幌地区における年齢別の人口の推移を図 1.2.4 に、年齢別人口割合の推移を図 1.2.5 に示します。平成 25 年から 29 年にかけての地区人口はほぼ横ばいで、大きな増減はありません。内訳をみると平成 29 年は平成 25 年に比べて、年少人口はほぼ横ばい、生産年齢人口は約 2,000 人減少していますが、高齢者人口は約 1,500 人増加しています。

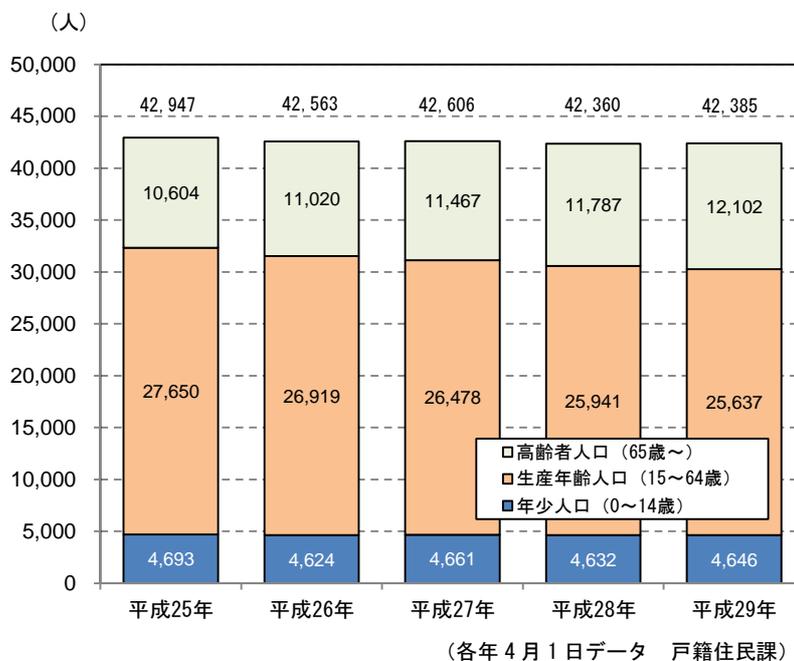


図 1.2.4 年齢別の人口の推移

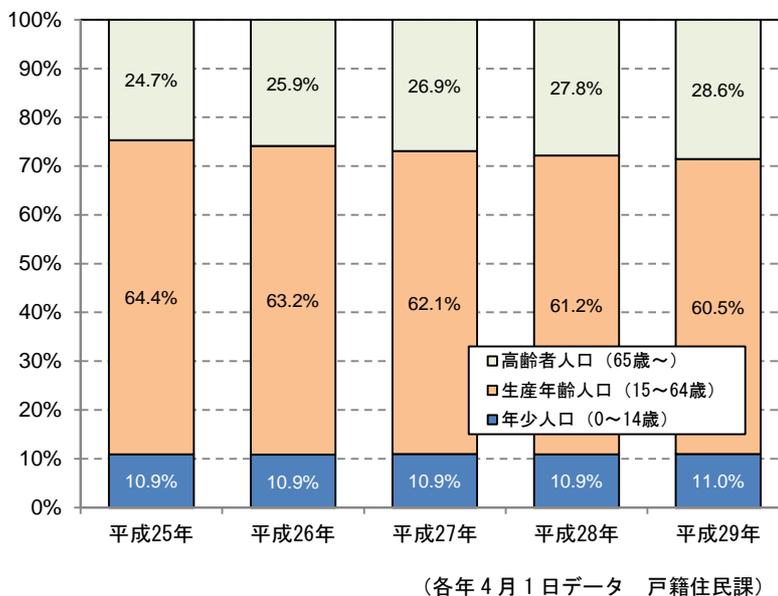
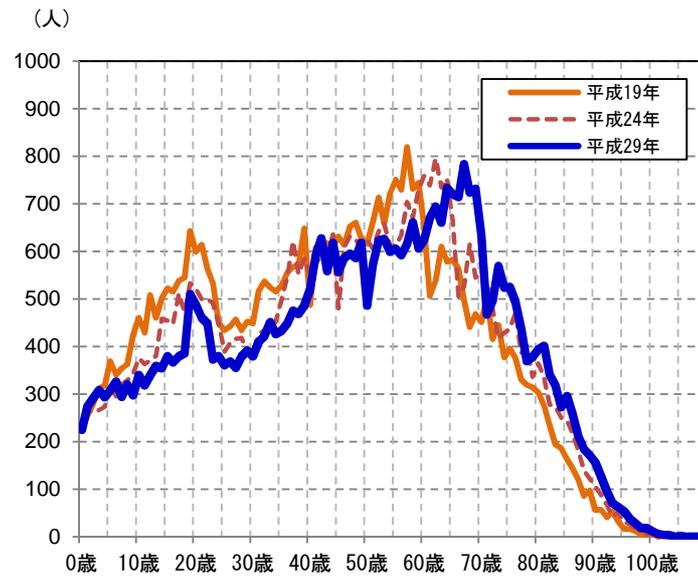


図 1.2.5 年齢別人口割合の推移

また、図 1.2.6 に野幌地区における各歳別の人口構成の推移を示します。平成 29 年は平成 19 年、24 年と比較して 40 歳代前半までは減少傾向にあり、60 歳代後半から増加傾向にあります。しかし、地区人口全体の人口構成としては前出の図 1.1.7 に示す市全体と比べて大きな違いはありません。

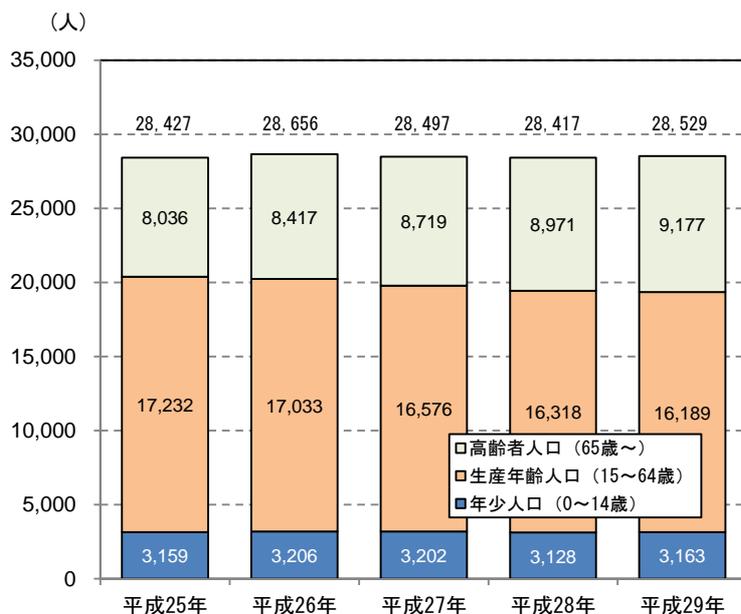


(各年 4 月 1 日データ 戸籍住民課)

図 1.2.6 野幌地区における各歳別の人口構成の推移

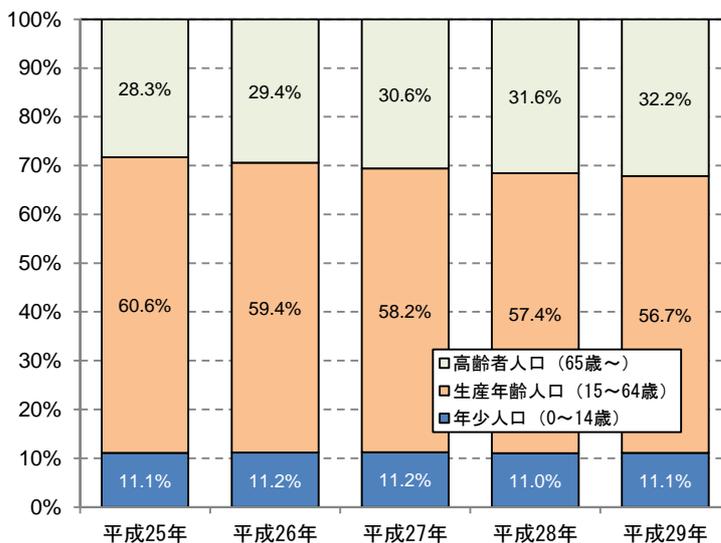
1.2.3 大麻地区

大麻地区における年齢別の人口の推移を図 1.2.7 に、年齢別人口割合の推移を図 1.2.8 に示します。平成 25 年から 29 年にかけての地区人口はほぼ横ばいで大きな増減はありません。内訳をみると平成 29 年は平成 25 年に比べて、年少人口はほぼ横ばい、生産年齢人口は約 1,000 人減少していますが、高齢者人口は約 1,100 人増加しています。本地区は、**本市の中で最も高齢化率の高い地区**であり、**平成 29 年には高齢化率が 32.2%**に達しており、これは 3.1 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者に相当します。



(各年 4 月 1 日データ 戸籍住民課)

図 1.2.7 年齢別の人口の推移



(各年 4 月 1 日データ 戸籍住民課)

図 1.2.8 年齢別人口割合の推移

また、図 1.2.9 に大麻地区における各歳別の人口構成の推移を示します。本地区内には市内に立地する 4 大学のうち 3 大学が立地しています。このため、本地区には 20 歳前後の学生が市内外から転入しているものと考えられます。これらの **20 歳代前半から 30 歳代後半の人口は平成 19 年、24 年、29 年の各年で減少傾向**にあります。また、40 歳代及び、60 歳代後半から増加傾向にあります。

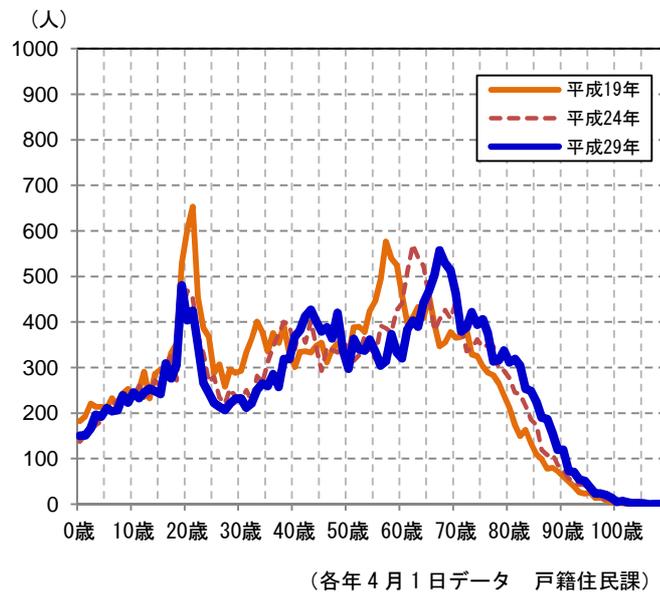


図 1.2.9 大麻地区における各歳別の人口構成の推移

2. 人口動態に関する考察

2. 1 人口動態に関する要因分析

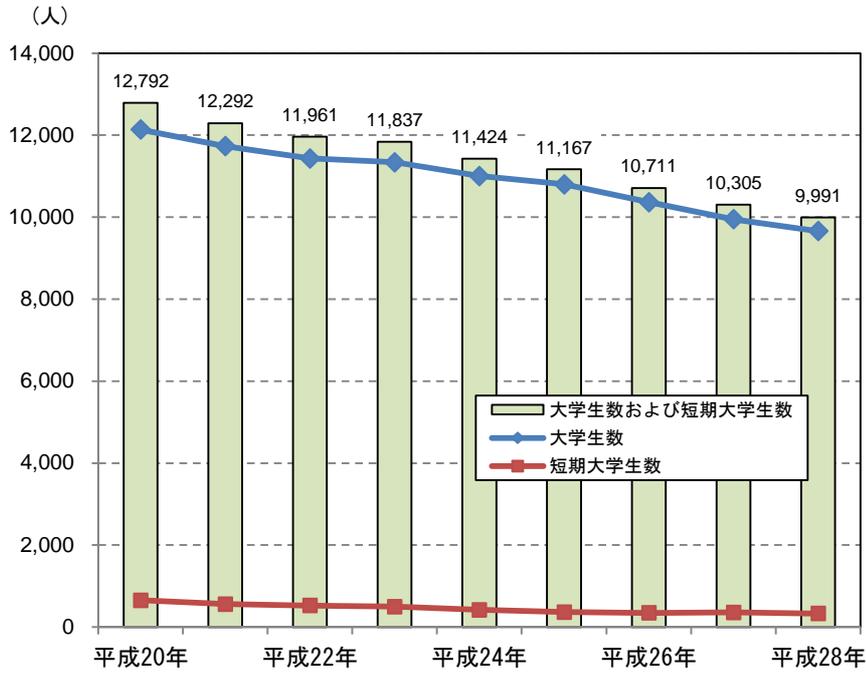
人口動態に影響を与える要因を抽出し、実績の推移について分析を行います。

2.1.1 学生数の推移

前述のとおり、市内には 4 つの大学と 1 つの短期大学が立地しています。図 2.1.1 に市内に立地する大学および短期大学の学生数（在籍者数）の推移を示しますが、平成 28 年には約 10,000 人が在籍しています。このうちの何人が市内に居住しているかは明らかではありませんが、在籍者数の推移は、本市の 10 歳代後半から 20 歳代の人口動態に大きな影響を与えています。

前出の表 1.2.2 は、住民基本台帳のデータをもとに作成したものであり、本市に住民登録している市民を集計したものです。本市内の大学などの在籍者で、市内に居住する学生の中には、本市への転入の際に住民登録せずに大学の近隣に居住している場合が考えられます。このため、住民基本台帳に基づく市民数と実際に居住している市民数との間に差があることが懸念されます。

ここでは、住民登録に関わらず、調査時点で市内に居住している市民に対して調査を行う国勢調査の結果を参照し、大学等での入学・卒業前後における人口移動の推移を検討します。表 2.1.1 に平成 17、22、27 年の国勢調査による 5 歳階級ごとの人口の推移を示します。国勢調査は 5 年ごとに実施されることから、平成 17 年に 15～19 歳だった市民は 5 年後の平成 22 年には 20～24 歳、さらに 5 年後の平成 27 年には 25～29 歳になります。ここで人口の推移をみると、平成 22 年に 8,842 人いた 20～24 歳の市民は、5 年後の平成 27 年における 25～29 歳では 4,772 人と、約 5 割にまで減少しています。また、平成 17 年に 10,715 人いた 20～24 歳の市民は、平成 22 年における 25～29 歳では 5,514 人と、約 5 割に減少しています。



(各年5月1日データ 資料統計担当)

図 2.1.1 市内の大学、短期大学の在籍学生数の推移

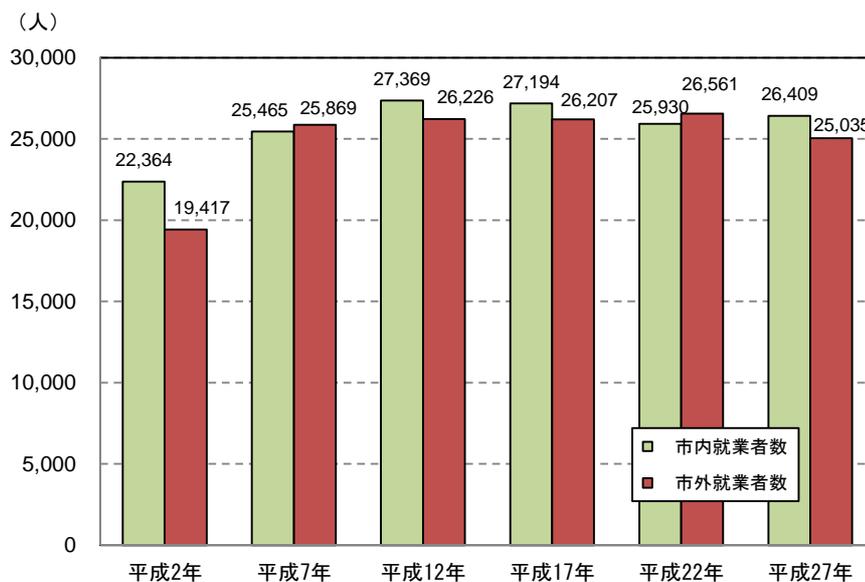
表 2.1.1 各年の年齢別人口割合の推移 (人)

	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年
0～4 歳	4.496	3.948	3.737
5～9 歳	5.815	4.999	4.481
10～14 歳	7.063	6.094	5.306
15～19 歳	9.474	8.886	7.463
20～24 歳	10.715	8.842	7.910
25～29 歳	6.217	5.514	4.772
30～34 歳	7.430	6.105	5.326
35～39 歳	7.766	7.856	6.473
40～44 歳	8.511	7.973	8.171
45～49 歳	8.490	8.495	7.904
50～54 歳	9.532	8.361	8.316
55～59 歳	9.823	9.543	8.301
60～64 歳	7.785	9.990	9.617
65～69 歳	6.766	7.618	9.770
70～74 歳	6.068	6.491	7.294
75～79 歳	4.616	5.611	5.958
80～84 歳	2.838	3.998	4.852
85～89 歳	1.452	2.165	3.012
90～94 歳	586	886	1.277
95～99 歳	140	216	368
100 歳以上	15	23	54
総 数	125.601	123.722	120.636

(国勢調査)

2.1.2 就業者数の推移

図 2.1.2 に就業者数の推移を示します。本市の就業者数は平成 7 年以降に 5 万人を上回り、それ以降は小さな増減を繰り返しています。本市は札幌市のベッドタウンとして発展してきた背景から、市内就業者と同程度の市外就業者が存在しています。本市の就業者に占める札幌市就業者の割合が高いことは表 2.1.2 に示す就業先別就業者数の推移からも明らかです。しかし、札幌市就業者数の割合は、平成 2 年の 90.0% (17,468÷19,417) から平成 27 年には 79.1% (19,815÷25,035) へと減少しています。これに代わって、札幌市に比べると就業者数に大きな差があるものの、北広島市や岩見沢市への就業者数が増加傾向にあります。



(国勢調査)

図 2.1.2 就業者数の推移

表 2.1.2 就業先別就業者数の推移

(人)

	平成 2 年	平成 7 年	平成 12 年	平成 17 年	平成 22 年	平成 27 年
就業者数	41,781	51,334	53,595	53,401	53,100	53,086
市内就業者数	22,364	25,465	27,369	27,194	25,930	26,409
市外就業者数	19,417	25,869	26,226	26,207	26,561	25,035
札幌市就業者数	17,468	22,682	22,136	21,773	21,244	19,815
北広島市就業者数	391	588	782	867	944	971
岩見沢市就業者数	390	577	696	797	905	954
その他	1,168	2,022	2,612	2,770	3,468	3,295

(国勢調査)

2.1.3 高齢者数の推移

表 2.1.3 に地区別の高齢者数の推移を示します。各地区での高齢者数は年々増加傾向にありますが、前述の通り、特に大麻地区では3.1人に1人が高齢者という状態にあります。

本市全体の各歳別の人口構成を示した図 1.1.7 や各地区における人口構成を示した図 1.2.3、1.2.6、1.2.9 で高齢者の人口構成の線形をみると、各年で大きく変化していないことから、高齢者は転入や転出でなく、人口動態の主たる要因は自然減であることがわかります。また、高齢者数は今後も継続的に増加するものと考えられます。

表 2.1.3 地区別の高齢者数の推移 (人)

	平成 25 年	平成 26 年	平成 27 年	平成 28 年	平成 29 年
高齢者数	29,610	30,896	32,142	33,148	34,092
江別地区	10,970	11,459	11,956	12,390	12,813
野幌地区	10,604	11,020	11,467	11,787	12,102
大麻地区	8,036	8,417	8,719	8,971	9,177
高齢者割合	24.5%	25.7%	26.9%	27.9%	28.7%

(各年 4 月 1 日データ 戸籍住民課)

2. 2 本市の人口動態のまとめ

少子高齢化は全国的な趨勢であり、本市でも同様の傾向にあります。これとは別に本市の人口増減に大きな影響を与える要因として、社会増減（転入、転出）があります。図 1.1.4 のとおり、平成 15 年度までは転出者数よりも転入者数の方が多い状態にありましたが、それ以降は増減を繰り返しながら推移し、直近では転入者数よりも転出者数の方が多い状態になっています。こうした状況を踏まえ、人口動態に影響を及ぼしている要因の考察を以下にまとめます。

2.2.1 市内の大学の在籍者数の減少

前出の図 2.1.1 で示したとおり、市内大学の在籍者数は年々減少しており、これにともなって市内大学への通学のために市内に居住する学生数の減少に影響しているものと見込まれます。特に地区内に 3 大学が立地する大麻地区では、在籍者数減少の影響が顕著で、図 1.2.9 に示したとおり、20 歳前後の人口が減少しています。

前出の図 1.1.7 を再掲した図 2.1.3 では、**全国的な少子化傾向、在籍者数の減少によって、図中①に示すように 20 歳前後の人口が大きく減少**しています。また、**図中②に示すように 20 歳代後半から 30 歳代前半の人口は大きく減少**しています。これは**卒業の後に市内に留まる学生は少なく、市外へ転出するケースが多い**ためと考えられます。

大学などの在籍者数の減少は、在籍期間の人口ばかりでなく、その後の年齢層の人口動態にまで大きな影響を与えていることがわかります。

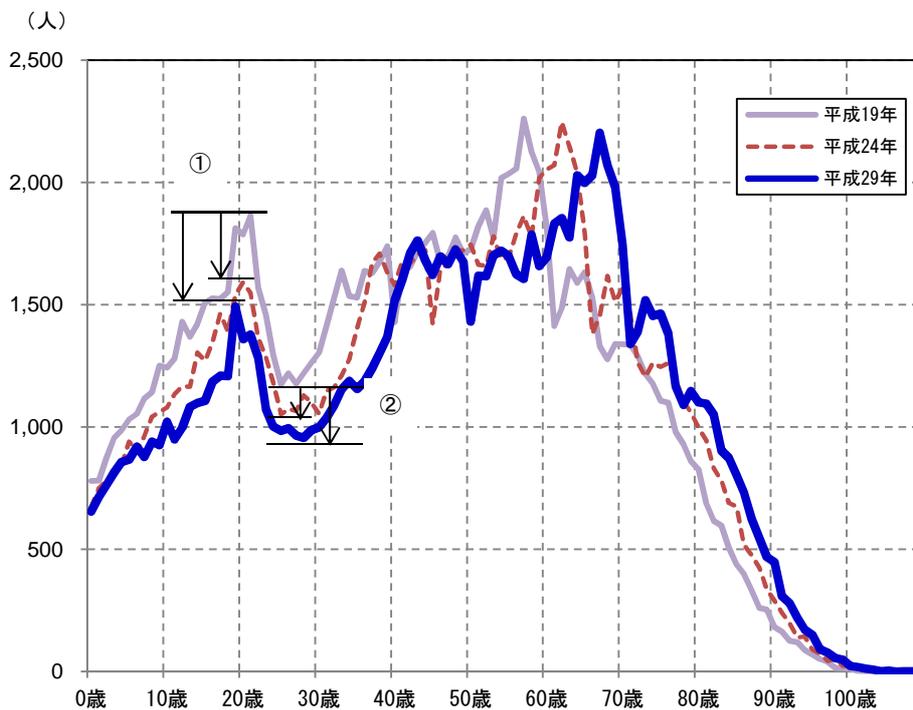


図 2.1.3 各歳別の人口構成の推移

2.2.2 市内に居住する社会人の構成の変化

本市が平成 29 年 5 月に行った江別市転入アンケート調査によれば、「本市に住むようになった理由」（複数回答）として、「就職・転勤・進学先が近いため」の回答割合は 20 歳代が 22.9%に対し、30 歳代、40 歳代では 10%程度減少しています。これとは逆に「希望する物件があったから」の回答割合は 20 歳代が最も低くなっています。つまり、20 歳代の市内に居住する多くの方は、就職・転勤・進学のために市内に居住していることがわかります。

表 2.1.4 本市に住むようになった理由（複数回答）

	家族・親戚・知人が住 んでいたから	買い物など日常生活 に便利だから	通勤・通学などで交通 の便が良いから	希望する物件が あったから	就職・転勤・進学先が 近いため
20 歳代	19.1%	5.9%	15.0%	11.8%	22.9%
30 歳代	14.2%	7.5%	14.0%	19.6%	12.8%
40 歳代	16.0%	7.0%	17.5%	17.2%	13.1%

（平成 29 年度江別市転入アンケート）

本市の 20 歳代の人口は前出の図 1.1.7 などから明らかなように継続的に減少しています。また、表 2.1.2 で示したとおり、**市内に居住し札幌市内に就業する市民の割合は減少傾向にあることから、就業先が札幌市内にある場合、20 歳代の社会人は本市内でなく本市以外、特に札幌市内に住まいを求めるケースが多くなっている**ことが考えられます。